第２部　随筆（作文）　テーマ「ごはんのにおい」

一般の部

佳作

愛に溢れたごはんの物語

白井明子

私は二十歳の時から祖父母と父三人を約二十年に亘り在宅介護して順に見送りました。父はまだ真っ暗い早朝から起きてお米をとぎ、決して炊飯器を使わずお釜でごはんを炊きました。初めちょろちょろなかぱっぱを教えてくれたのも父でした。私が仕事に行くまでにはふっくらと湯気のたつ白飯ができてお弁当にも持って行きました。「沢山食べなさい」「お弁当も沢山詰めなさい」と毎日言った父。

末期癌で死期が近づくと、父は私に言い含めました。「お前がお嫁に行ったら食べることで苦労しないように嫁ぎ先に毎月一俵の米を送ろうと思っていたんだ」冬の早朝は寒く、お米をとぐ父の両手はかじかんで、あかぎれとリウマチで指が曲がっても私が代わるからと言っても炊いてくれた父。私がお嫁にいって肩身の狭い思いをしないようにと婚家にお米を届けようとしてくれた父。毎日、朝昼晩と我が家は白飯でした。白くて、ふっくらと丸く膨らんで立つごはん。おいしく炊けてあたたかい、やわらかい、やさしい香りの漂う素朴なごはん。それは同時に、父の温かさであり、父の優しさでした。

父が天に召されてからは、母や私がごはんを炊きますが、どうしても父のとは違うのです。水加減や火加減もあるでしょうが、何の差かと考えると、父が８２才まで人のために、人を大切に想って、人に真心から親切に、見返りや打算や寸分の混じりも気もない清らかで愛に満ちた気持ちで、大切な家族においしいごはんを食べさせたい一心で、炊いたおかげだと思うのです。

ただお米を買ってきてといで炊いて食べた、ということではないのです。「米」の漢字は八十八と書き８８の人の手を経て食卓にのぼると父に教わりました。米農家の皆さん、販売流通卸売店頭全ての過程の皆さん、そして炊いてくれたお父さ

ん、ありがとう。ごはんを通して私は人間愛を知りました。